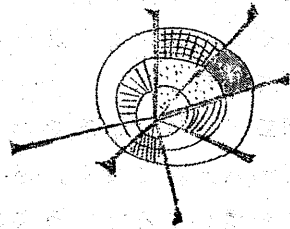


とは知った後では当然のようでもあるが、現地で短時日の内にすることは容易でないとい一人で歩いて得られる内容でもない。この時は引きつづいて兩東麓にまわり4年生の古田君と岡本君と落合つて黄瀬川や愛鷹の山麓を歩いて卒業論のフィールド指導に従った。西富士では甚く堆積していたアカマサやエカスマサが兩東麓の愛鷹山麓では火山灰堆積の方向性のために、夫々西富士の10倍も厚く堆積していた。マサの見分け方が愛鷹でも容易にできたのはその前日までの総合調査の野外調査のおかげであり、これが両君の卒業論文に生かされていれば、正に総合調査の功徳は果しない。(Jan. 29, 1961)

## 山 び こ



### 調査雑感

川井 玲子

昨年9月末から1ヶ月群馬県の土地利用調査に出張した。入所した年に監査室から物言いがついて名古屋行きが前日に取消されて以来、千葉や東京の調査に出してもらったことがあってもひとの名を借りないでこんなに遠くに出たのははじめてである。近頃は土地利用が卒業論の必修となつていて図は既に御存知のことと思うが、土地利用調査というのは見た通りで頭を使わず誰にでもできる代り75項目40種類もの区分を長さ面積の基準に合わせて採用しなければならず神経の疲れるものである。空中写真を唯一の武器とするが、調査地域が運悪く公私どこの機関によつても撮影されていないとなると、十数年前米軍が撮つた1/4万写真を使わなければならないはめになる。たとえ新しい大縮尺の写真が手に入つても、こゝ高崎～太田のような良好な二毛田地域では2月撮影のものでは色調からは水田と畑の判別さえつきにくく、地割を頼ることになるが、ここ2,3年急激にふえた陸田ともなるともう一筆調査をまつより他はない。ここはまた名だたる養蚕地域として、徹高地には桑園と普通畑が半々、七分三分と交錯し、根刈り仕立てで葉を落し束ねた状態にある冬の写真では両者の判別は全く難しい。

1/5万分の1の精度と1ヶ月間に半図葉というノルマを考えると、一筆調査もならず、道路の交点などでサンプル調査を試みてもあるいは白くあるいは黒く写つていて全くあてにならない。桑園はその上、本畑と畦畔植、間作のあるなしを区別する規定である。堤防の上から見はるかすと一面桑畑となつ

ていても並付いて畑の中を走ると本畑は意外に少ないものである。

建設省に屈すというのに、調査の機動力は自転車に限られている。途中で降えてしまう未整理地区の田んぼ道、広くてもハンドルをとられバウンドの激しい砂利道、堤防の上のわだちのついた一本道などいやなものだ。比々で下りてメモをとり、右左の景況を頭に入れつゝ前と後からとはしてくる車に注意を払い大きなトラックに砂炭を浴びせられ、その上即席に習った自転車ときているから時々倒してはあごを作つたりする。外に出ていて一番困るのはトイレとおひるを食べる所だがこれは専ら小中学校を拜啓した。物見高い生徒の集まってこない授業中をねらつて。堤防の草地はお弁当を食べるのに気持よさそうにみえても乳牛が放し飼ひされていてブヨがわあんとするほど集まってくる。

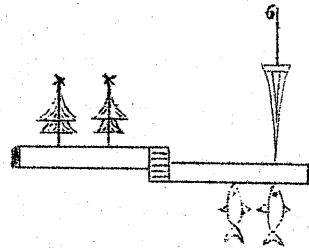
この調査では教人が班を作つてゆくが、県庁で資料集めをするとすぐ地域分担して一人一人になる。あらかじめ県庁から旅館、自転車、人夫につき便宜供与方お願いするという文書が廻っているので、伊勢崎では市役所の方が一緒に何軒か廻つて希望の所に交渉してくれたが、そのあとの尾島では到着前に手廻しよく決められてあったのが割烹旅館のため一晩でこりて教育長の家にかえてもらうようなことをした。しかし誰もいない3部屋つゞきの離れは静かすぎて夜余り気持のよいものではなかつた。

こうして毎朝8時〜8時半に宿を出て5時頃帰ると早速内業にかゝる。写真の上を書いてきたものを原図におとす。明日のコースと留意すべき項目の準備もしなければならぬ。昼間の疲れで夜の仕事はなかなかほかごらないが、朝目がさめて雨さえ降っていなければ指で色ぬりしているわけにもいかず、やはり出てしまう。その他にやっかいなのは経理書類の作成である。旅行経費に合わせた場所と日付で決められた金額分の領収書を取り、教部の複写をつくる。やれ判の位置が悪いの番地が落ちてゐると電車にのつてとり直しにゆくわずらわしさには手を疑いた。

そんなことがあつても出張はやはり嬉しい。気候はよし、地の利はよしで日曜はフルに活用して赤城、標名、尾瀬、三波石へと足をのばした。先程北海道で測量中ロッククライミングして事故を起した例があるのでウィークデイは謹慎する。市役所の方の案内で伊勢崎銘仙で名の知られた織物の各工程を2日間にわたつて見学することもできた。調査期間を通じて鉄もつ手を休めてじろじろ見られたり、役場や旅館で好奇の目を向けられることの少なかつたのは気持がよかつた。さすがに、あ天下の国だけあつて女の人の働くことに抵抗を感じないらしい。婦人にひっこみ思案や卑屈さがなく質問にもは

きはきしていてからつと明るいあたり、別にいばっているわけではないがこれが上州名物の本体かなど合奏した次弁である。

(オニ回生 建設省国土地理院)



## 都立大学に学んで

植 材 靖 子

私がお茶大から都立大学社会学科に学んだ理由はいろいろありましたが、その大きな要素は、人文地理学というのはもつと人向くさい学問なのではないかという漠然とした疑問からでした。最後学年になって卒論をかかねばならなくなつた頃、いろいろな大学から学生が集まって、色々な学問的意図に基いた総合的農村調査が行われ参加したわけですが、その学問的成果はともかくとして、それぞれの学問の場について話しあえる横のつながりが多少ともできたことは、私共参加者にとって大きな収穫であつたといえましょう。調査の中での話しあいの場で、人文地理学を学んでいる以上は、社会科学のベースを形成している経済学や、人文現象の中で絡みあつている人間関係などについてもつと知るべきであることがわかりましたが、その時はすでに大学生活を終ろうとしていたのです。その後運良く都立大に学士入学することができ、更に三年間在学することになりました。その間の学園生活について、簡単に御紹介してみたいと存じます。

都立大学は伝統のない新制大学ですが、マンモス大学とは異なり、少数の学生から構成されているところに特色がございます、例えば社会学でも毎年平均5、6人ならば多い方で、年によりますと1人位しか（もつとも留年組もおりますが）卒業生の出ないこともあります。社会学は更に社会学専攻と社会人類学専攻に分かれ、学問領域としては、前者は近代以後の社会に関する実証的研究が多く、後者は主に未開社会を対象としているのですが、週一回のゼミナールでは合同して同じテーマを論じあつております、私は農林社会学を専攻いたしましたので、社会人類学の様子はいくわしくはわかりませんが、新進鋭の若い学者グループである青年人類学グループによる研究（アフリカや東南アジアの未開社会に関する研究など）は学界でも高く評価されております。